
戦極姫・信行物語

チルノ・トレバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦極姫・信行物語

【Nコード】

N4573Y

【作者名】

チルノ・トレバー

【あらすじ】

正史では兄、織田信長に謀反を起こし、最期には城に呼び出され殺されてしまう弟、織田信行。正史とはかけ離れたこの世界で性別も性格も能力も全てが違う『織田信行』はどう生きていくのか……

正史とはかけ離れた世界でもう一人の織田信行の物語が今始まる。

父の葬儀・客僧の言葉

応仁の乱によって室町幕府の權威は失墜し、力のある者が守護大名を追い落とし

て新たな大名となる……俗に言う下克上の風潮が広がっていった。戦国時代の始まりである。

日々終わりの見えない戦いが国々で続いて行き、多くの名のある将や民達が戦や

流行病で死んで行く……その中、物語は尾張・末盛城から始まる……

《末盛城・信行自室》

父上が病でこの世を去ってしまった……今でも信じることが出来ない。

昨日共に城下町を歩いた時にはあんなに元気に笑っていたのだから……

あの姿を見た者は誰も信じることが出来ないだろう。

だが私が一人こうして部屋に閉じこもっている間にも、父上の葬儀の準備は

着々と進んでいた。

皆は心に区切りをつけているのだろう……だが私には出来そうに

ない。

「父上……」

幼い時に父上が私に買ってくれた青い髪紐を両手で握り締め、静かにそう呟いた。

《次の日万松寺》

日が明け、父上の葬儀が行われた。親族や家臣達が焼香を終えて行く、

だがその中には喪主である姉上の姿は無かった。

「信長様はまだ来られぬのか？」

「お父上の葬儀だというのに……」

「喪主であらせられる筈の信長様が葬儀に来られぬとは何事か！」

姉上の姿が無いことに家臣達が不満を零し始めた時だった。
ドカドカと足音を鳴らしながら、姉上が現れた。だが……

「なんだあの格好は！」

「あのうつけが！お父上の葬儀にあのような格好で！！」

「信長様は礼儀というものが解かっておらぬ！」

家臣達が口々に声を上げる。姉上の服装は正装では無く、いつもと変わらぬ

南蛮の甲冑であった。

姉上は周りから上がる声を気にすること無く、父上の仏前の前に立つ。そして……

「なっ!?!」

私は姉上の突然の行動に声を上げてしまった。

姉上は抹香を父上の仏前に投げ付け、そして声を上げた私には目もくれずに、

そのまま帰ってしまう。

その後辺りに静寂が広がる……突然の事にどうすれば良いのか分からないの
だろう。

（だがただこのまま何もせずに座っては居られないだろう）

そう思った私は父上の仏前の前に立ち、作法道理に焼香を終えた。
それを見た家臣達が口々に私を賞賛してきた。

「見ろ! うつけと違い、勘十郎様はきちんと焼香を終えられたぞ」

「やはり勘十郎様は礼儀がなっておられる。それに比べて信長様
は……」

「勘十郎様を当主にすることも考えればならんな」

だがそんな言葉は私の耳には一切届かず、姉上が父上の仏前に
抹香を投げ付けたあの光景が頭の中でグルグルと
回り続けていた。

そんな中、一人の客僧が静かに姉上を賞賛し始めた。

「皆様勘違いなさってはなりませんぞ」

「なに？それはどういうことだ」

「信長様こそ国持ちの大名になる御方と存じまする」

「あのようなうつけが尾張を収めるというのか」

「いかにも。作法同様に焼香を行うことは子供にも出来る……これからの時代

あのような常識に捕らわれない考え方や行動を行える者が、この日の本を治めることになるやもしれませぬ……」

そう言った客僧は笑みを浮かべた。まるで確信が有るかのよう。この時は私以外客僧の言葉に耳を貸す者は居なかった。だが後客僧の言葉が

本当だということを思い知ることになる。自らの身をもって……

キャラ紹介其の一（前書き）

書いている内に熱が入って酷いことになってしまった……

キャラ紹介其の一

『討つしか……無いのか?』

織田勘十郎信行

容姿

信長を凛々しくしたような外見。

幼い時に父、信秀に買ってもらった青い髪紐で髪をポニーテールにしている。

またスタイルが良く胸に関しては信長よりも大きい。

服装は男版信行と同じ格好で、腰には愛刀の兜切り安親と脇差の岩切伊右衛門を差している。

表情を表に出す事が苦手で、勘違いされることが多い。

性格

毅然とした性格で、民の生活を第一に考える。

戦の時には自ら先頭に立って、戦う勇敢さも持っている。

無駄な犠牲を出すことを嫌い、謀略などで出来る限り不安要素を減らしてから

城に攻め込む等慎重な面も有るが、その慎重さが仇となり機を逃すこともある。

派手な物が苦手で地味な物を好み、信行の部屋には必要な物以外は置いていない。

概要

織田信長の実の妹で有り、末盛城城主。

軍事・政治・謀略全てにおいて高い能力を持ち、特に剣術に関しては天武の才を持つ。

『民が居るからこそ国は成り立つ』と言う信念を持っており、常に民の安寧を最優先に考えている。

その為信長が織田家を継ぐことに不安を覚えている。

ステータス

兵種 槍

統率 1 1 智謀 1 0 政治 1 3

スキル 1

大規模陽動

スキル 2

統率号令

スキル 3

死中生求

統率 + 8

発動タイミング

戦力が相手より少ない時

終了タイミング

戦闘終了時

台詞

戦闘時

出撃メンバー選択時

「承知した」

行動選択時

「さあ……行くぞ」

攻撃時

「耐えられるか！」

スキル発動時

「我が刃……その身で味わうがいい！！」

敗北時

「くっ 無念だ……」

城攻撃時

「火矢を射掛けよ！」

城制圧時

「勝ったな……さあ、勝鬨を挙げろ！！」

内政選択時

「承知」

内政行動時

「これで良し」

計略失敗時

「失敗か……」

引き抜かれた時

「分かりました……従いましょう。」

引き抜きを断った時

「信賴を裏切ることとは出来ない」

武器紹介

兜切り安親

末盛城城下にある鍛冶屋で打たれた打刀。余計な飾りは一切無く、派手さは無いが

その出来は天下五剣にも劣らない。

元々の名前は安親だったが、信行が初陣の時に兜ごと敵将を切り捨てたことから、

信行がそう名付け愛用している。安親の名前は、この刀を打った刀鍛冶の

青木岩安親から付けられた。

岩切伊右衛門

兜切り安親を打った、青木岩安親の友人の曲輪伊右衛門が打った脇差し。

信行の話を聞いた伊右衛門が信行に贈った。

名前の由来は巨大な岩を、いとも容易く切り裂いてしまったことから名付けられた。

安親と共に愛用している。

決意・謀反へ……（前書き）

文才が欲しい……

決意・謀反へ……

父・織田信秀の葬儀から、いくらかの時が経った。姉上が起こしたあの一件で姉上は

織田家当主に相応しく無いと言う考えが広がり、私を当主にしようとする動きが

起き始めていた。

私は自らの意思とは関係無く、後継ぎ問題に巻き込まれて行く……

《末盛城・信行自室》

「邪魔するぜ」

私が政務を行なっている時だった。私に最も長く仕えてくれる家臣である、

佐久間大学盛重が私の部屋にやって来た。

「何用だ？盛重、見ての通り今私は忙しい。甘味処への誘いはまたにしてくれ」

「そりゃ残念」

そうやって盛重は肩を竦める。

私と盛重の関係は上司と部下の関係というより、友人のようなものだった。

元々は他の家臣達と変わらずに接していたのだが、ある時に甘味処に

無理やり連れて行かれた時に打ち解け、

偶に共に甘味処に行くようになった。

「勘十郎お前に客だぜ」

「客？」

「ああ信長様が来てる」

「姉上が！？すぐに通してくれ！」

「そう言うと思ってもう通してある」

「そうか……済まないな」

「気にすんなって、それじゃ俺はこれで」

そう言って盛重は去っていった。それから少しした後、姉上の声が聞こえてきた。

「私だ、信長だ。入っても良いか？」

「どうぞお入りください」

「うむ、では失礼する」

そう言って姉上は私の前に座る。そして部屋を見渡していた。

だが生憎、私も部屋には必要な物以外は置いておらず、姉上の興味を引くものは

恐らく無いだろう。

「この部屋には必要な物しか置いていませんから、姉上が興味を

引く様な物は、
置いては居ないのです」

私の言葉に姉上はそうか……と残念そうに呟いた。

「それで姉上こたびはどのような用件ですか？世間話をするために来たわけでは

無いのでしょうか？」

私がそう言った瞬間、穏やかな表情を一変させ用件を話し始めた。

「……そうだ。私がここに来た理由はお前が私に対して、
謀反を企てようとしていると言う噂の真偽を確かめに来たのだ」

「謀反を企てようとしているなど、根も葉も無い噂……姉上そのような戯言、

聞き流せば良いのです」

「だが、お前は私が織田を継ぐことに不安を感じているようだが？」

「!？」

心を読まれた様な錯覚を感じた。姉上が今行った言葉は心には思っている、

口に出したことは一度も無いはず……

それを言い当ててきた姉上に底知れぬ何かを感じた。

「どうした？顔色が悪いようだが？」

「いえ、大丈夫です。ご心配には及びません……とにかく私は謀反など考えてはおりません」

「そうかお前の言い分は良く分かった、今回はお前を信じるとうよう」

用件が終わったのか、姉上はそう言って立ち上がり部屋から去ろうとする。

だが戸を開けた所で立ち止まり、此方を振り返らずにこう言ってきた。

「謀反を起こしても良いぞ？ 最もその時は全力で潰させてもらうがな」

姉上の声は自信に満ち溢れていた。お前が謀反を起こそうと、私がお前に負けることは無い……そう語っている様にも聞こえた。私が呆氣に取られて喋ることが出来ない中、姉上は

「ではな」

そう言って静かに去っていった……

姉上が城を訪れてから少しばかりの時間が流れた。

だが姉上の奇行は収まることを知らず、むしろ日に日に酷くなっている

私を当主にしようという動きが前よりも活発化し始め、強行的な手段に

出る者まで出始めた。

私と姉上の関係が険悪になっていく中、遂に事件は起きた。

姉上が4500人を率いて、末盛城への侵攻を開始したという情報
報が、

伝令から伝えられたのだ。

《末盛城・軍議の間》

伝令の報告を受け、主だった将達が集まっていた。

かれ柴田の異名を持つ、家中随一の猛将・柴田権六勝家

優れた武勇と高い統率能力を持つ、戦上手の佐久間大学盛重

古くからの家老で、それぞれの得意分野で私を支えてくれている。

林秀貞・通具

同じく古くから仕えてくれている家臣である。津々木蔵人

他にも河辺平四郎・鎌田助丞・富野左京進等が居た。

軍議の内容は勿論姉上と戦うか、それとも降伏するかを議論して
いた。

最も降伏を提案しているのは一部の政務官だけだったが。

そんな中勝家が声を上げた。

「何を躊躇う必要があるのです！向こうは既に軍を率い、此方に

向かって

来ているではありませんか!!」

「柴田殿の仰る通り。信行様にに戦う意思が無くとも、信長様はこの末盛城を攻め、

勘十郎様を亡き者にするでしょうな」

通具が勝家に同調する。確かに姉上は一度決めたことを覆すことは殆ど無く、

一度敵対すると決めた者には一切の容赦しない。その為、私がこのまま抵抗せずに

いたとしても姉上はこの城を落とし、私は殺されるだろう。だが

……

「勘十郎様、御決断を!!」

「「「殿!!」」」

皆が口々に私に決断を迫ってくる。

「……」

盛重だけは何も言わず、ただ此方を見つめていた。だが喋ることはなくとも、

その瞳が全てを物語っていた。ただ一言『お前が決めろ』そう語っていた。

その瞳を見た私は心の中で覚悟を決め、家臣達に問い始めた。

「私に実の姉を討てと……お前達はそう言っているのだな？」

「我が生き残る為には信長様を討つしか有りませぬ」

私は自分に言い聞かせるように言葉を紡ぎ続ける。

そうしなければ、決心が鈍ってしまう……そんな気がしたから。

「他に道は……無いのかな？」

「道はただ一つ。信長様を討ち、織田家当主になる……それしか有りませぬ」

「討つしか……無いのか？」

この言葉が最終確認だった。そして最終確認の答えてくれたのは

「……そうだ。討つしか……無い」

盛重だった。

そして、盛重の言葉を聞いた私は

「この私・織田勘十郎信行が、姉・織田上総介信長を討ち、尾張を統一する……！」

家臣達に対して宣言した。暫しの間静寂が広がるそして

「「「「「おおおおおおおおお……！」」」」」

雄叫びが辺りを包み込んだ。

この日私は姉・織田上総介信長を討ち、尾張を統一することを決意した。

決意・謀反へ……（後書き）

2をやったことがある人は解ると思いますが、最後の方の台詞は2の信行のイベントをちよつといじって見ました。
解りますかね？

大敗（前書き）

今回もひどい出来だぜ……あんなに盛り上げておいて、信行ちゃん結局負けちゃいました。

大敗

《稻生原・信行軍本陣》

姉上と戦う事を決めた後、私は直ぐに柴田権六勝家、林通具、佐久間大学盛重らと共に4300の兵率いて城を発った。

稻生原到着すると直ぐに隊を展開させ、私・勝家・盛重の三人が先鋒を務め、

林通具は遊撃部隊を担当し、後方には河辺平四郎・鎌田助丞・富野左京進が布陣していた。

一方、信長軍も佐久間信盛・佐々孫介・山田治部左衛門を先鋒に据え、

後方に布陣している姉上の守りに、新参の明智十兵衛光秀・羽柴秀吉を

配置している。

暫くの間、互いに睨み合ったまま動くことは無かったが、ほぼ同時に法螺貝の音が響きわたり、

稻生原における激戦の火蓋が今切って落とされた。

《稻生原》

「私に続け!!」

馬に乗った私が先陣を切り、敵陣に切り込んで行く。

「勘十郎に遅れるなよ」

「勘十郎様に続けえ!!」

私に勝家と盛重もそれぞれ敵陣に躍り出て行く。

金属のぶつかり合う音と、兵士達の掛け声や悲鳴……

まだ戦が始まってから僅かな時しか過ぎていないのにも関わらず、濃厚な血の臭いが辺りに漂っていた。

「ふっ！」

「アガッ」

馬上から此方向かって、攻撃してきた足輕の首を切り裂く。

辺りに血飛沫が飛び散り、兜切り安親が血に染まる。

その時、勝家の大きな声が聞こえてきた。

「敵将、山田治部左衛門。この柴田権六勝家が討ち取ったあ!!」

勝家のこの言葉に兵士達の士気が上がり、それに負けじと他の将も奮起し始める。

此方の兵の気迫に圧されているのか、信長軍は徐々に押され始める。

「ええい！何をしておるか！貴様らそれでも佐々の兵か!!」

佐々孫介が声を荒らげる。私は孫介に向けて馬を走らせた。

「その首貰うぞ！」

「おのれえ！裏切り者が調子付くなあ！！」

互いの刀がぶつかり合う。そして私達は激しく打ち合い始めた。

「どうした？孫介。太刀筋が単調になってきているぞ」

「舐めるなあ！！」

孫介が怒りに任せ、刀を振るって来る。だが疲れが溜まってきたのか、

孫介は息を切らし始める。

「勝てないことは分かったはずだ。降伏しろ、悪いようにはしない」

「ほざくな信行！わしの主は信長様ただ一人！貴様なんぞに使える気は

毛頭ないわああ！！」

孫介がそう怒号を上げながら、首を目掛けて刀を振るってきた。私は孫介の斬撃を避け、逆に孫介の首を切り裂いた。

孫介の首から血が吹き出し、血飛沫が舞う。孫介は馬から落ち、二度と起き上がることは無かった。

「敵将、佐々孫介。織田勘十郎信行が討ち取った！」

私はそう高らかに声を上げた。

私達が次々に武将を討ち取っていく中、姉上が全軍を率いて前線に現れた。

その際に姉上の怒号によって勝家の軍は敗走、通具は姉上に直々に討ち取られてしまう。

それにより完全に勢いを失い、私たちは劣勢に追い込まれていた。

「報告！丹羽長秀・造酒丞信房・三左衛門可成の奇襲により、河辺平四郎殿・鎌田助丞殿・富野左京殿進戦死！！」

「津田左馬允丞・高畠三右衛門・木全六郎三郎・松浦亀介が此方に向かって接近中、

このままでは完全に退路を塞がれてしまいます！！」

私は呆然としながら、伝令の報告を聞いていた。

これが私が下した決断の結果なのだ。私があの時姉上と戦う道を選ばなければ、

死なずに済んだ者も居たかもしれない。

「私の……私の所為だ……」

私は罪悪感に耐え切れず、地面に膝を付き動けなくなってしまう。その時私の前に

一人の足軽が立ち、刀を振りかぶろうとしていた。

私は目を瞑り、自らの死を受け入れようとした。だが何時までも痛みが来ず、

代わりに聞こえてきたのは人が倒れる音だった。

そして私が目を開けるとそこに居たのは

「まだ無事みたいだな？」

傷だらけの姿で、不敵な笑みを浮かべる盛重だった。

「盛重……」

「何、湿気た面してやがる。そらとつとと逃げるぞ」

盛重はそう言って、私を立たせようとするが私はその手を振り払う。

「私はここに残る……ここで私が逃げたら、ここで散っていった者たちに

顔向け出来ん。だから……」

私はそう言って顔を俯かせる。それを聞いた盛重は私に近寄り

「よっと」

私を横抱きにして抱き抱えた。

「いっいきなり何するんだ！」

「大人しくしろ。お前に死なれると俺が困るんで……伝令！
全軍に撤退命令を出せ」

「はっ！」

「何を……」

そこまで言った所で盛重が走り出し、喋ることが出来なくなってしまう。

「クッ……ウウ……!!」

私は自分の不甲斐無さに、ただ咽び泣く。

この日私は多くの兵士と家臣達を失い、大敗を喫するのだった。

降伏・信行の覚悟（前書き）

今回も駄文でござる。

恋愛描写入れてみたが……

降伏・信行の覚悟

稲生原で敗北した私達は、私と盛重は末盛城に、秀貞是那古野城に退却した。

そして姉上はそれぞれの城に兵を送り、私達を完全に包囲する。このままでは私に従った者達を、皆殺しにされるかもしれない。そう思った私はある決意を固めようとしていた……

《末盛城・信行自室》

私は一人明かりも点けず、部屋で一人思案に耽っていた。窓から月明かりが射し込んでおり、月の光が部屋を照らしている。

「このまま座して死を待つか、それとも……」

私はそう呟く。このまま籠城していても勝ち目無いことは、既に分かりきっていることだった。

今回の一件は私が勝手に起こした物、家臣達はただ従ってくれただけだ。

もう彼らを巻き込むわけにはいかないだろう。

「やはり私の命を賭しても……」

「勘十郎少しいいか？」

私が覚悟を口にしようとした時だった。盛重が私の部屋を訪ねてきたのは……

「こんな夜更けに悪いな」

「気にするな。どうせまだ起きるつもりだったからな……それで何の用だ？」

すると盛重が頭を掻きながら、言いにくそうに言葉を紡いできた。

「あーなんつーかお前の様子が気になったから？」

「何で疑問系なんだ？」

「いや、俺にも分からないんだよ。ただお前の様子が、いつもと違って見えたから

何か気になってな」

「……少し悩み事があってな。でももう大丈夫」

「そうかい、そりゃ良かった。だけどよ……」

盛重が突然私を抱き締めた。

「え？」

私は突然のことに反応出来ず、間の抜けた声を上げてしまう。だが不思議と嫌じゃなく、重盛の体温を感じ、安心出来た。

「あんまり一人で抱え込むなよ？全部自分が悪いって思ってるんだろうが、

「そりゃ違うぜ？俺達が自分からお前について行った、それだけさ」

「だが！」

「だがじゃない。お前はなんでも背負い込みすぎなんだよ。たまには周りを頼れ……」

「それが出来ねえなら俺だけでも頼れ、どんなことがあっても俺はお前の味方だ」

「……」

「俺が言いたいことはこれだけだ……悪かったな、いきなり抱締めたりして」

「そう言って盛重は私から離れようとする。」

「待ってくれ！……もう少しこのまま……」

「だが私はもう少し、安心出来るこの体温を感じていたくて、盛重を引き止め、もう少しの間抱きしめてくれるように頼む。」

「ああ良いぜ。お前が満足するまで、このままで居てやるよ」

「それを聞いた盛重は優しい笑みを浮かべ、私を抱きしめてくれた。そして私は盛重の腕の中で決意を固めた。」

「私の命を犠牲にしても、私に従ってくれた者達を護ってみせると……」

《次の日信長軍・本陣》

私は家臣の誰にも知らせずに一人で城を発った。
そして私はこの戦いを終わらせる為に、信長軍本陣の前に居る。
私が近付いてきたことに気が付いた見張りの兵が、私の前に立ち
塞がり

声を上げた。

「貴様何者だ！」

「織田信長に伝えろ。織田信行が来たとな」

「信行様でございましたか！これはとんだご無礼を！こちらで暫
しお待ちくだされ」

見張りの兵はそう言って、急いで本陣の中に入って行く。
その後少し経った後、兵士が戻ってきて本陣の中に案内された。
案内された場所には姉上含め、信長軍の主だった将が全て揃って
いるようだ。

「一人で敵軍の本陣に来るとは……」

「よくもまあここに顔を出せたものだな」

「あれが信行様……」

「信長様の妹だけあって、信長様に似てるなあ」

私の姿を見て、将達がざわめき始める。だがその中で姉上だけは、
ただ此方を

見つめていた。その後姉上が皆を静め、私の用件を聞いてきた。

「それで一体何用でここに来た？」

「はい。私は降伏の意思を伝えに参ったのです」

「降伏？私がそれを認めると思っているのか？」

「ただでは申しませぬ。我が身、いかようになさってもらっても構いません」

「ほう……つまりそれは」

姉上はそう言って腰の刀を抜き、刀を私の首筋に突き付けてきた。首筋が僅かに切れ、血が首筋を伝う。

「お前がここで私に殺されても良いというわけだな？」

「構いません……ですが!!」

私は姉上を睨み付け

「その時は私に従った家臣や兵士、そして我が領内に居る民達の安全を、

保障して頂きたい!! 彼らはただ私に従ったのみ、全ての責は私にある!!」

そう言い放つ。

「嫌だと言ったら？」

「その時は」

私は鞘から刀を抜き、姉上と同じく刀を首筋に突き付ける。

「ここで貴方を殺すだけだ……」

私は殺気を込めてそう言った。それを聞いた姉上は私の変化に戸惑いながら、私に聞いてきた。

「何故だ……何故他人の為に、自らの命を賭けることが出来る？」

「それは彼等が仲間であり、友であり、家族だからです。その彼等の為に

命を賭けることは、私にとって当たり前のことなのです」

「私にはよく分からん」

姉上は理解出来ないと言わんばかりに首を振った。

その後姉上は私達の降伏を認め、軍を引いてくれた。

その際に姉上は私を含む、謀反を起こした全ての者を許すことでこの戦いを収めることに

成功するのだった。

第一章登場人物紹介

織田上総介信長

織田家当主にして、信行の姉。

その格好や行動によって、うつけと呼ばれていた。

だが信行が謀反を起こした際、迅速に制圧して自身の能力の高さを家中に知らしめた。

明智十兵衛光秀・羽柴秀吉

共に名前のみ登場。

信長の護衛を担当していた。

佐々孫介

先鋒部隊を指揮していた将の一人。

小豆坂七本槍の一人。

徐々に劣勢に追い込まれていく先鋒部隊を叱咤し、なんとか踏み止まらせていた。

だが信行と一騎打ちを行い、しばらく打ち合うも最後には討ち取られる。

山田治部左衛門

先鋒部隊を指揮していた将の一人。

特に活躍せず勝家に討ち取られてしまう。

佐久間信盛

先鋒部隊を指揮していた将の一人。
退き佐久間の異名を持つ。

盛重の部隊と戦闘中に、通具に横撃され敗走した。

丹羽長秀・造酒丞信房・三左衛門可成

後方から部隊を奇襲し、河辺平四郎・鎌田助丞・富野左京進を討ち取り

本陣を壊滅させる。

津田左馬允丞・高畠三右衛門・木全六郎三郎・松浦亀介

増援部隊。

信行軍の退路を塞ごうとしていた。

織田勘十郎信行

この作品の主人公であり、信長の妹。

苦心の末、謀反を起こす。

先鋒部隊として佐々孫介を討ち取るなど活躍するが、
信長に巻き返され大敗する。

その後居城を包囲されるが、降伏し許される。

佐久間大学盛重

信行軍側の先鋒部隊の一人。

多くの首級を挙げるなど活躍する。

敗戦が決定的になった時には、茫然自失となっている
信行を抱え稲生原から退却する。

柴田権六勝家

信行軍側の先鋒部隊の一人。
かれ柴田の異名を持つ。

山田治部左衛門を討ち取るなど活躍するが、信長の怒号によって
兵士達が逃げ出し退却を余儀なくされる。

林秀貞

稲生原に向かわずに、那古野城を護っていた。

その後信行軍が敗退した後も城に籠もるが、信行が降伏した際に
開城、

信長に許される。

林通具

林美作守と呼ばれることも。

信行軍側の遊撃部隊担当。

作中では描写はないが、信盛の部隊を横撃し退却させ、
黒田半平の片腕を切り落とし退けるなど活躍していた。
だが半平を退けた直後、信長が現れ一騎打ちを行うが
壮絶な戦いの末、破れ討ち取られる。

津々木蔵人

秀貞と同じく、稲生原には向かわずに末盛城を護っていた。
その後信行が降伏した際に、同じく降伏。

河辺平四郎・鎌田助丞・富野左京進

後方部隊として本陣の守備にあたっていたが、
丹羽長秀・造酒丞信房・三左衛門可成の奇襲により部隊は壊滅、
河辺平四郎・鎌田助丞・富野左京進の三名は討ち取られる。

キャラ紹介其の二

『我等の故郷を護るのだ!!』

織田勘十郎信行

容姿

変更無し。

性格

慎重な性格だが、決断力が不足している。

概要

織田信長の実の妹であり、末盛城城主。

過去に姉・織田信長に謀反を起こし、稻生原で戦を行うも大敗、城を包囲されるが信長に命懸けで降伏し許される。

その後信長との姉妹仲は回復するが、意見が合わず口論になることが多い。

盛重とは友人以上恋人未満の関係であり、本人は先に進みたいと思っているが

一歩踏み出せずにいる。

また信行の名に特別な思い入れがあり、本当に心を許した者しか呼ばせない。

『通れるもんなら通ってみろよ……!!』

佐久間大学盛重

容姿

顔は軍退役後のジャン・ハボックで、服装は戦国無双2の島左近と同じ。

無銘の野太刀を肩に担いでいる。

性格

飄々として自由奔放な性格。

概要

信行に一番古くから仕えている家臣。

政務は苦手だが、戦では目を見張る活躍を見せる。

信行に惚れており、色々とアプローチを掛けている。

信長と対等に話せる数少ない人物。

稲生原の活躍により鬼佐久間の異名を持つ。

ステータス

兵種 騎馬

統率13 智謀8 政治3

スキル1

騎兵号令

スキル2

突撃

スキル3

鬼佐久間の激励

味方全体が統率+13

発動タイミング

防衛時

戦力が相手より少ない時

津々木謀反（前書き）

正木時茂がイイ女過ぎる……

津々木謀反

私が謀反を起こしてから少しばかりの時間が流れた。

家臣の殆どは姉上を当主として認めていた。

だが一部の者達が不穏な動きをしていると聞いた私は、その真偽を問うべく津々木蔵人を呼び出すのだった……

《末盛城・応接の間》

「勘十郎様今回はどのようなご用ですか？」

そう言って蔵人は人の良い笑みを浮かべながら、そう問ってきた。

「この頃何やら裏で動いているようだが……何を企んでいる？」

「これは異なことを、私は織田の為を思い……」

「この頃許可無く兵を集めているようだが？それも織田の為か？」

「それは何時この尾張に、外敵が来ても良いように……」

「斎藤とは同盟を結び、当面の敵は今川のみ……その今川も動く様子は無い。」

……私を舐めるなよ？貴様の行動などお見通しだ」

私がそう凄みを効かせると、蔵人は静かに笑い始める。

「流石ですな勘十郎様。ですが……」

蔵人がそう言った瞬間、襖が開き大勢の兵士が入ってきた。私は咄嗟に刀掛けから、兜切り安親を取ろうとするが……

「ぐっ!!」

兵士達に床に押さえ付けられてしまう。

蔵人が私を見下ろして、笑っていた。

「蔵人貴様!!」

私はもがいて兵達の拘束から脱出しようとする。

だがその直後後頭部を殴られ、私は意識を失った……

《軍議の間》

side 盛重

津々木の奴に相談事があると呼ばれ、俺は軍議の間に来ていた。

「一体何の用だろうか？」

俺と奴は親しい仲ではないはずだ。それどころか俺を目の敵にしていたはず……

その奴が相談事？俺は違和感に首を傾げながら襖を開く、だが俺は襖を開いたまま固まってしまった。

軍議の間には見覚えのない男達が座っており、見知った者は林秀貞と

津々木蔵人だけだった。

いやそれは問題では無い……問題は津々木が上座に座って居るところだ。

彼処に座って良いのは、勘十郎ただ一人……

そこまで考えた時に何が起きたかが理解出来た。

「津々木い……」

「遅かったな佐久間？」

この男が勘十郎を手に掛けたのだということ……

「てめええええ!!」

俺は怒りに任せて、津々木に殴り掛かるが……

「おっ落ち着いてくだされ盛重殿！」

秀貞が俺を羽交い締めにし、俺の動きを止める。

「秀貞！お前なんで邪魔やがる！あいつは勘十郎を!!」

「ですから落ち着いてくだされ！勘十郎様はまだ生きております
!!」

「……どういう事だ？」

秀貞の言葉に動きが止まる。そして秀貞が説明し始めた。

「勘十郎様は座敷牢に捕らえられているのです」

「つまり貴様が妙な真似をすれば、勘十郎様を殺すというわけだ」

「てめえ……」

俺は津々木を睨み付けるが、津々木は軽く受け流す。

「おやこれは怖い……そんなに彼女が大事かね？ 安心したまえ……
貴様が大人しく私の言うことを聞いていれば、手は出さん」

「……それを俺が信じると思ってるのか？」

「私も武士の端くれ、我が家名に賭けて誓おう」

「分かった……」

俺は大人しく下がることにした。本来なら信じるはずが無い……
だが、津々木は自らの家に誇りを持っており、家名を賭けて約束
をした時は

必ず約束を果たして来た。

奴が家名を賭けたなら嘘はつかないだろう。

「さあ佐久間も落ち着いた所で、軍議でも始めようか。

この私が尾張を治める為にな……」

津々木がそう言って上機嫌に笑う。

その光景を俺はただ、黙って見ていることしか出来なかった……

颯馬・尾張に流れ着く（前書き）

今回は短いです。

この章が終わったなら、違う話も書いてみようかな？
ヒロインは勿論時茂で

颯馬・尾張に流れ着く

《清須城・軍議の間》

side 颯馬

俺の名前は天城颯馬、軍師志望の浪人だ。俺はさる高名な軍師の下で学び、

この日の本を渡り歩いて、誰が天下を取るのか自分なりに見極めてきた。

そして天下を取るのは今川義元公であると判断し、

今川の軍師になるべく、相棒である知猫のキクゴローと共に、意気揚々と

船に乗り込んだのだが……

「はあ……」

俺は自分の運の無さに溜息をつく。

俺は今川家のある駿河では無く、織田家のある尾張に居た。

あの後直ぐに嵐に遭い、俺は海に投げ出されてしまった。

その後尾張に流れ着いてしまったというわけだ。

目が覚めた時は、生きていることの素晴らしさを感じたものだったが……

そして何の因果か、俺は織田の軍師をすることになってしまった。

「どうしてこんなことに……」

そう言って、頭を抱えた時だった。襖が開かれ、肌に直に鎧を着

込んだ

殆ど裸のような格好の女の子が駆け込んできた。

「大変！大変です！！」

「なんだ騒々しい」

「それが……勘十郎様が謀反を起こしました！！」

それを聞いた信長様の顔が一変し、他の家臣達もざわめき始める。

「何！？信行が！？」

「まさか！！勘十郎様が謀反などと……」

「何かの間違いではないのか？」

「ふうむ……」

誰のことなのかさっぱり分からない俺は、近くに居た光秀さんに聞いてみることにした。

「あの……先程から話している勘十郎とは？」

「信長様の妹君です。過去に謀反を起こしたことがあります」

俺は光秀さんの言葉に成程と、頷いた。

その後信長様が俺に謀反鎮圧の指揮を執れと命令してきた。

俺は必死に断ろうとするも、信長様は聞き入れず、そのまま軍議は終了してしまった……

side out

《末盛城・座敷牢》

「う……」

目を覚ました私は体を起こす。

「痛……！」

私は後頭部の痛みに顔を顰めながら、辺りを見渡す。
どうやら私は今まで一度も使われたことの無い、座敷牢の中に居るらしい。

「此処に入った最初の人間が私とは……」

溜息をつきつつ、脱出の手立ては無いか周りを調べてみる。

「駄目か……」

だが脱出の手立て見つからず、私は仰向けに倒れる。

「取り敢えず今は体を休めよう……」

脱出の手立てが無い以上、騒いでも仕方あるまい。
そう考えた私は今は、体を休めることに専念するのだった……

side 颯馬

信長様に謀反の鎮圧を命じられはしたものの、相手がどのような人物かが

分からなければ、策を立てることも出来ない。

そう考えた俺は家臣の方々に話を聞いてみることにした。だが……

「聞けば聞く程、謀反を起こすような人物には思えないな……」

話を聞いた家臣達は誰もが、彼女を褒め称えていた。特に丹羽さんが言っていたことが、頭から離れなかった。

「民が居るからこそ国は成り立つ……か」

勘十郎様はそれを信念に掲げており、常に民の安寧を第一に考えていたらしい。

それに非常に慎重な性格で今回の様に、突発的な行動に出ることは少ないとも言っていた。

「なんだ……？ 何かがおかしい……」

俺は僅かな違和感を感じていた。まるで歯車が噛み合っていない様な……

そんな違和感を感じていた。

そしてそれと同時に、ある一つの可能性が頭を過ぎる。

「有り得ないか……」

俺はその可能性を頭の片隅に押し込み、如何にして謀反を制圧するかを考え始めるのだった……

side out

暗躍する雪、確信を得る颯馬（前書き）

何を書いているか最早分からない……今回は何時にも増して酷い出来だ。

暗躍する雪、確信を得る颯馬

《清須城・颯馬自室》

side 颯馬

俺は自室でこの前の戦闘で得た情報を整理していた。

だが整理していく中、前もって聞いていた情報で想像していた人物象と

かけ離れていたことに頭を悩ませていた。

前に丹羽さんに聞いていた様な、慎重で用心深い用兵では無く、勢いに任せてただ突撃を繰り返すばかりだった。

そのおかげで此方の策にまんまと掛かり、一気に決着を着けることが出来たのだが……

それに敵の総大将も聞いていたような美女では無く、豚の様に肥えた男だった。

また将としての在り方も、光秀さんが教えてくれた物とは大分食い違っていた。

勘十郎様は率先して前に出て戦う勇敢な性格であると聞いていたのだが……

あの男は不利になると逃げ出そうとし、捕まると命乞いをする始末。

「何が何だか分からなくなってきたな……」

俺がそう溜息を着いた時だった。天井からくの一の雪が現れた。

雪とは昔、行き倒れている所を俺が助けてからの付き合いで、そのことに恩義を感じた雪が、俺に仕えると言って強引に俺に仕えてしまった。

最も俺と雪の関係は上司と部下という関係ではなく、仲の良い友人といった関係なのだが……ちなみに信長様にはまだ話していない。

雪の実力は極めて高く、情報収集から暗殺まで何でもこなすことが出来る。

今回もその能力を生かして、敵の内部情報を探ってもらっていた。

「どうだった？」

俺がそう聞くと雪はニツと笑みを浮かべ、情報を伝えてきた。

「旦那の読み通りだ。謀反を起こしたのは妹さんじゃない。

重臣の津々木蔵人って奴が、今回の謀反を起こした張本人みたいだ」

「やっぱりか……勘十郎様が、何処に居るか分かるか？」

「ああ、地下の座敷牢に囚われてたぞ。実際に会って話したし」

「会ったのか!？」

「まあな。案外元気そうだったぞ?……妹さんが言うに、最近津々木が裏で

怪しい動きをしていたらしい。それを知った妹さんは津々木を問い詰めて、

本当なら捕らえようと思ってたらしい」

「怪しい動き？」

「裏で地元の土豪達と密会したり、無断で兵を集めたりしてたらしい」

雪は机に置いてあったお茶を一口啜って、話し始めた。

「それでそこまでは良かったんだけど
誤魔化しが効かないって分かった津々木が、近くに待たせておいた
自分の兵を呼び寄せてな、それで妹さんは拘束されて
座敷牢に放り込まれてしまったらしい。」

「成程な」

「今回の仕事はこれで終わりか？ 終わりなら仕事料として食い物
くれ」

雪はそう言って手を差し出した。

「分かったよ……饅頭で良いか？」

そう言って饅頭を差し出すと雪は目を輝かせた。

「松菱屋の饅頭か！ これ旨いんだよね……依頼料は確かに貰った
また用件があれば呼んでくれ」

そう言って格好良く決めようとするも、顔がにやけている為
格好良く無い。

「ではさらば!!」

そう言って雪は一瞬で視界から消えた。

きつと何処かの屋根の上で、あの饅頭を美味しそうに食べるのだろう。

「暢気な奴だなあ」

雪が饅頭を頬張っている光景が頭に浮かび、顔が綻ぶ。

その後俺は信長様にこの謀反の真実を報告する為に、信長様の部屋に向かうことにした。

side out

《数時間前末盛城・座敷牢》

「暇だな……」

そう言って私は息を吐く。座敷牢から出ることが出来ない私は、座敷牢に置いてある書物を読み漁っていたのだが、それも全て読んでしまい

やる事が無くなってしまった。

誰か来ないだろうか？ そう思うも私が此処に囚られて、食事を持つてくる見張りの兵士

だけでその兵士も食事を置いたら直ぐに帰ってしまう。

その為、話し相手にもならなかった。

「暇すぎる……」

私がそう言葉を零した時だった。

「おいおい……本当に居たよ……」

彼女が現れたのは……

「君は誰だ？」

私はその声を掛けながら、彼女を観察する。
服装を見るに忍びの者だろう。

「わっち？ わっちは……とある人に仕えてるくの一さ」

「ある人？」

「今は教えられないけどな。まあその内会うことになるさ」

「それで……こんな所に何の用だ？ 此処には座敷牢しか無いぞ？」

「いや、城で情報収集してたら、ここの城主が囚えられてるって話を聞いてさ。

その話が本当か気になって、此処に来てみたんだよ。
でもまさか本当に居るとは思ってもいなかったけどな……」

「……情けない限りだよ。そうだ確か君は、情報収集をしに来たと言っていたな？」

「そうだけど……それがどうかしたか？」

「丁度良いから、話しておこうと思ってな。この謀反の真相を……」

私は彼女にこの謀反の真相を話し始めた。

私が知りうる全ての事を……

その後私が話し終わると、彼女は礼を言って去って行った。

彼女はその帰り際に『必ず助けに来る』と言ってくれた。

その言葉に私は確かに勇気付けられたのだった……

秀貞は涙を流し、津々木は囁う（前書き）

遅くなってすまぬ。リアルが忙しくて中々投稿出来なかったが、
なんとか方が付いたからこれからは多分大丈夫だと思う。
秀貞レギュラー決定。

秀貞は涙を流し、津々木は囁く

《末盛城・秀貞自室》

side 秀貞

津々木殿が勘十郎様を幽閉し、謀反を起こしてから少し経つ。
あの時、私は何も出来なかった。

勘十郎様の声を聞き、応接の間に駆けつけた私が見た物は
数人の兵に押さえ付けられている勘十郎様と、それを見下ろして
笑う

津々木殿だった。

異変に気がついた私は勘十郎様を助けようとしたが、
他の兵達が私を囲み、身動きが取れなくなってしまった。

その間に勘十郎様が連れて行かれていき、私はそれをただ
見ていることしか出来なかった……

私は生まれつき武に恵まれなかった。

それでも自分は武家の子なのだからと、必死に鍛錬したが
腕前は大して上がらず、兵士より強い程度の腕前になるので精一杯だった。

だから私は武を鍛えるのを諦め、政治や兵法について学んだ。
どうやらこちらの方が向いていたらしく、
次々に知識を吸収して行き、内政官として働くようになった。
必死で学んだ知識が誰かの役に立ったのが嬉しかったのを
今でも覚えている。

その代わり、戦に出たことは数える程しかないのだが……

その為、私は荒事に向いていなく、人を切ったことだって殆ど無い。
い。

……あの時、私は足が竦んで動けなかった。

自分は武家の子だと言いながら、自分の主を護ることも出来ずに
見ていることしか出来なかった。

「情けない……」

そんな言葉と一緒に涙が溢れる。

自分の弱さが悔しくて……悲しかった。

私は声を押し殺し、ただ咽び泣くことしか出来なかった――

side out

《末盛城・天守》

side 津々木

月が夜空を照らしている頃、私は一人天守に居た。

ここから見える城下を何も言わずに眺め続ける。

月の光が辺りを照らし、幻想的な光景が広がっていた。

今回の謀反成功する事は有り得ないだろう。

相手はあの信長だ。あの女がこの程度の謀反を収められないはず
は無い。

更にあの女に仕えている家臣も優秀な者達が揃っている上に
兵の練度も高い。

それに比べ、こちらは欲に目が眩んだ土豪や城主。

有能なのは勘十郎を人質にして従わせている

佐久間と林のみ。

他の者達は突撃ばかり繰り返す猪武者や策士気取りの愚か者……
そして寄せ集めの兵等、軍として成り立っていることが奇跡に等しかった。

近い内に織田軍がここに攻め寄せ、私は信長に殺されるだろう。
いや、もしかしたら私を殺しに現れるのは、勘十郎かもしれない。
だがいずれにしても、私は殺されるだろう。

「フフフ……」

口から笑みが零れる。

勝ち目の無いこの状況がどうしようも無く楽しかった。
苦境に立たされるほど心が躍る……

「やはりこうでなくてはな……」

そう言って私はただ嗤い続ける。

一刻も早く、あの姉妹のどちらかが私を殺しに現れることを願
いながら――

side out

士氣上がる謀反軍、動き出す秀貞（前書き）

今回は早く書き上げることが出来たぜ。

この調子で書いていきたい。

今回は殆ど秀貞視点です。

士氣上がる謀反軍、動き出す秀貞

《末盛城周辺の平原》

side 颯馬

俺達織田軍は次々に敵を撃破して行き、残すは末盛城のみとなっていた。

そして今俺達はこの謀反を終わらせるべく、末盛城に向かっていく。

あの後、俺は信長様に真実を話しに行ったのだが、まるで相手にされなかった。

その後も何度も訴えたのだが聞き入れられず、機嫌を損ねてしまい今では話も聞いてくれなくなってしまっていた。

「はあ……」

口から溜息が溢れる。

どうにかして謀反を起こしたのが、勘十郎様ではないことを信じさせなければならぬ。

だが一体どうやって信じさせればいいのか？

それを思いつくことが出来ず、俺は再び溜息をつくのだった――

side out

《末盛城・軍議の間》

side 秀貞

軍議の間には、謀反に加担している豪族や城主が集まっていた。だが謀反当初に比べてその数は減り、顔には疲労や絶望が浮かんでいる。

誰もが勝てるはずと思っていたうつけが、全く敵わない相手だと分かり、謀反に加担したことを後悔しているのだろう。少し考えてみれば分かることだった。

相手はうつけと呼ばれているが、天才的な指揮能力を持つ織田信長。

家臣達も皆優秀だ。

それに比べてこちらは正直寄せ集めの軍でしかなく、手柄欲しさに仲間内で足を引っ張り合っている。

そんな軍が精強な織田軍に勝てるだろうか？

……勝てるはずがない。

蜘蛛の子を散らす様に蹴散らされるだろう。

それも分からずに安易に謀反に加担した彼らに、私は呆れて物も言えない。

私が一人呆れていると、津々木殿が立ち上がり声を上げた。

「諸君、まだ諦めるのは早いぞ！」

「何を言うのだ津々木殿！！勝ち目が無いのは誰の目から見ても明らか、

しかも奴等はここに向かって来ているのだぞ！！」

「」「そうだ、そうだ！！」「」

山口教継がそう声を荒らげると、周りの者達も同調して声を上げ

る。

「では降伏するか？まあ、した所で皆殺しにされるだろうが……」

「それは……」

考継が言葉に詰まる。

それを見た津々木殿は面白そうに笑いながら話し始めた。

「考えても見ろ奴等があのようにならば結束が固いのは、ひとえに信長という存在が有ってこそだ。

その信長がわざわざここに向かって来ている……これは好機だ」

「好機……とな？」

「そうだ、あの女さえ殺すことが出来れば結束は無くなり、烏合の衆と化すだろう」

「うむ……」

「希望が見えてきたぞ！」

「ああ俺達はまだ戦える！」

「うつけめ、一矢報いてやるわ！！」

津々木殿の言葉に乗せられ、戦う気力を取り戻していく将達。
……こうも単純な者達が一時とはいえ仲間であると思うと頭が痛くなってくる。

何故今の言葉を聞いただけで勝てると思うのだろうか？

私は周りに聞こえないように溜息をついた時だった。
一人の兵士が駆け込んで来た。

「報告します！！付近の平原にて織田の軍勢を確認！！」

兵士の報告を聞いた津々木殿がニヤリと笑う。

「来たか……さあ諸君、織田信長の首を取って参れ！
山口殿、総大将は貴殿に任せる。頼んだぞ！！」

「お任せあれ、必ずや信長の首を取って参ろうぞ！！
往くぞ皆の者！！」

「「「応！！」」」

そうして山口達は意気揚々と戦場に向かって行き、
津々木殿も部屋から立ち去る。

私以外人が居なくなった軍議の間で一人決心を固めていた。
勘十郎様を助ける事が出来るのは、警備が手薄になる今しかない。
だが勿論見張りの兵は居る。

一人二人なら何とかなるが、あの津々木殿が手を打っていない
はずがない。

恐らくかなりの兵士が居るだろう。

私の剣の腕では勘十郎様を助け出すのは難しい。
だが……

「もう……逃げてたまるか！！」

私はそう言って軍議の間から出る。

私の頭に浮かんでいるのは、勘十郎様が連れて行かれるのを

ただ見ていることしか出来なかった自分の姿だった。
私はそれを振り払い、座敷牢に向かって走り出すのだった――

s i d e o u t

信行救出（前書き）

この頃、秀貞がもう一人の主人公に思えてくるんだ……

信行救出

《末盛城・座敷牢へ続く廊下》

side out

私は少し離れた場所で様子を見ていた。

やはり警備は厳重であり、しかも彼らは津々木殿の直属の兵士のようだ。

彼らは皆腕利きの兵士で、真っ向から突っ込んでいっても返り討ちになるだけだろう。

どうにかして彼らの数を減らそうと策を考えるも、彼等が策に掛かるとは思えなかった。

「……フウ」

ゆっくりと息を吐き、刀に手を添える。

覚悟は決めた……後はやるだけだ。

覚悟を決めた私は鞘から刀を抜き、兵士達に切り掛って行くのだ
った――

side out

《末盛城・座敷牢》

「――ん？」

眠っていた私は僅かに聞こえてきた音で目が覚めた。

殆ど人が来ないこの場所で物音が聞こえるのは珍しい。

外で何か起きているのだろうか？

少しすると音が止み、何かを引き摺る音が聞こえてきた。

そして直ぐにある人物が現れたそれは――

「秀貞！？」

「御無事ですか？勘十郎様」

傷だらけで今にも倒れてしまいそうな秀貞だった――

「秀貞！！その傷はどうした！！それに何故ここに……」

「話は……後です。まずはここから出てください」

そう言っ秀貞は座敷牢の鍵を開け、私を外に出す。

だがその直後、秀貞は近くの壁に寄りかかって座り込んでしまう。

「秀貞！！」

私は直ぐに彼女に駆け寄り、傷の具合を確かめる。

左肩から右脇腹にかけて深い切り傷を負っており、その傷からかなり出血していて

このままでは命の危険すらあった。

「慣れない事はするものじゃありませんね……おかげでこのざまです」

そう言って秀貞は力なく笑う。

「まさか見張りの兵士を……どうしてそんな無茶をしたんだ!!」

「それしか方法が無かったからですよ。……そんなことより勘十郎様

私のことは気にせず、津々木殿を止めてください」

「何を言っている!! お前を放って行けるはずがないだろう!!」

「今行かなければ、本当に取り返しのつかないことになります!!」
……大丈夫です。これぐらいの傷なら、大したことありませんから」

そう言ってこちらに向かって笑いかけてくる。

だが顔は青白く、息は荒い。

強がりと言っているのは目に見えて明らかだった。

だが……

「……分かった」

そう言って私は立ち上がる。

私は彼女の気持ちを無碍には出来なかった。

「それでは——」

「お待ちを……丸腰で行かれるのはさすがに危険です。
この刀を使ってください」

秀貞が私を引き止め、腰にの刀を差し出してきた。

「だがそれではお前が……」

「大丈夫です。見張りは倒しましたし、それにただの兵士がここまで来ることはありません」

「そこまで言うならこの刀は借りよう」

私は刀を受け取り腰に差す。

「必ず……必ず戻って来る!!」

「はい……待っています」

その言葉を聞いた私は頷き、軍議の間に向かって走り出した。

side 秀貞

「行ったか……」

勘十郎様が立ち去り、ここに残って居るのは私だけになった。
血を流しすぎたのか視界は霞み、体の感覚は既に無くなっている。

「無茶し過ぎた……かな？」

そう言って苦笑いする。

「でもたまには……ゲホッゴホッ!!」

それも良い物だ……そう言おうとした私は、激しく咳き込み血を吐き出す。

痩せ我慢をしていたが、それも限界のようだ。
そして直ぐに抗いがたい睡魔が襲って来る。

「勘十郎様……どうか、ご無事で……」

そう言って瞼を閉じる。

そして勘十郎様の無事を祈りつつ、私の意識は闇の中に沈んでいった――

side out

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4573y/>

戦極姫・信行物語

2011年12月15日14時46分発行